

2000年10月16日

ディケンズ・フェロウシップ日本支部 ニューズレター

2000年度総会は10月7日、甲南大学で開催された。会場は教室と解放廊下をうまく合わせ、一方で研究討論に熱中し、休憩時に一步会場を踏み出すと、そこには「ロンドンの呼売商人」の展示が行われていた。総会は研究発表、シンポジウム、および朗読という、盛りだくさんの企画からなり、また展示は12枚のカラー図版、本、チャップブックそれに歌声の録音を並べていて、学問と遊びの双方を存分に楽しむことができた。以下、総会の報告と今後の予定についてお知らせいたします。

総会

西條支部長の司会によって議事がすすめられた。

1 総会議事

(1) 役員および任期

役員は『年報』記載通り。「日本支部規約」の改正により、理事の任期は3年となるが、すでに1年間の任期は終えたと理解し、2年後に改選する。佐々木理事の任期は3年とする。

[以上可決]

(2) 2000年度活動報告

臨時総会・春季大会開催(6月10日、於広島大学) Dr. Paul Schlicke 招聘および博士の全国7大学における講演会、日本支部規約改正(6月10日) ロンドン本部より New Charter の受領(7月29日)、『年報』の発行(10月7日)、総会開催(10月7日、於甲南大学)。

[報告了承]

(3) 2000年度会計報告・監査および2001年度会費

別紙の通り会計報告および監査報告があり、了承・可決された。

[可決]

2001年度会費は、本年度と同じ6,000円に据え置く。

[報告了承]

(4) 諸報告

a 春季大会は2001年6月9日に成城大学で開催します。研究発表を希望される方は年内に青木理事まで申し出て下さい。

b 『年報』23号は原・田中・西條の3理事の審査により、投稿論文8編中、5編を採択し掲載、書評は原理事に一任した。今後、書評には内外の著書を取上げてゆく予定です。

c 松岡理事より、会員の業績の電子化およびウェブ掲載への依頼があった。支部のウェブサイト充実のために、会員諸氏の協力をお願いいたします。

d Dickens Fellowship Conference の今後の予定。

2001年 New York Friends of Dickens, July 19-25 (College of Mount Saint Vincent, Riverdale, New York)

2002年 London, July 18-25 (University College, London)

2003年 Bristol & Clifton, July 24-29 (Clifton Hill House)

2004年 Melbourne, at the end of July (Univ. of Melbourne)

2 研究発表

新野緑氏(神戸市外国語大学)の司会で、閑田朋子氏(日本大学)による次の発表があった。

「Household WordsにおけるDickensの編集方針—“On Strike,” “Locked Out,”

Hard TimesにおけるPreston ストライキを他誌と比較して」

ヴィクトリア朝の雑誌、週間新聞を豊富に取上げてストライキの扱い方を比較し、ディケンズのストライキ観を引き出そうとする意欲的な発表であった。

3 シンポジウム

田中孝信氏（大阪市立大学）の司会により「ディケンズと帝国」について松村豊子氏（江戸川女子大学）要田圭治氏（広島大学）田中孝信氏の3名が各々担当部分を受持ち、難解なテーマに挑んだ。3名ともよくまとまった発表で、せめてあと30分質疑応答の時間があればさらにテーマを煮詰めることができたのにと惜しまれるほど、内容の濃いシンポジウムであった。

松村氏の発表では、ドンビー家の崩壊と再構築が父と娘の関係から捉えられ、そこにフローレンスの中国行きの意味を探る。いまだ夢のある時期で、家族の新たな構築が、自由貿易による新たな海外市場の獲得に結びついている。それが『荒涼館』の段階になると、要田氏によれば、帝国の首都ロンドンの衛生改革と警察権力を重視するディケンズの姿勢のなかに、大英帝国の拡大の基盤はまず本国の安定・充実に見なければならぬとする彼の帝国意識が表れてきている。そして、最晩年の『エドウィン・ドルードの謎』では、海外進出の代償としてオリエントからの逆侵略の恐怖と、イギリス社会自体のオリエント化が田中氏によって指摘された。全体として、ディケンズの楽観的な態度、帝国意識の形成、そして悲観的な態度への変化が跡付けられたかと思う。

4 朗読 (17:20 ~ 17:50)

Professor David Rycroft（甲南大学）は、かつて京阪神地区で英語を教えている英米人を集めて素人演劇を演出・監督していたこともあり、この日の *Bleak House* (25章) の朗読はブ口の俳優に匹敵するすばらしい朗読で、会場が沸きたった。

5 懇親会

懇親会（於大学食堂）には39名が参加し、会員相互の楽しい語らいと交歓を盛り上げた。とりわけヴィクトリア朝のメロディーの紹介として“Come Home father” (Written & composed by Henry Clay Work, 1832-1884) の歌が提案・披露され、参加者の大歓迎をうけた。

お 知 ら せ

- 1 2001年度(2000年10月~2001年9月)の年会費6,000円を12月末日までに同封の振込用紙でお支払い下さい。2000年度年会費未払いの方には *Dickensian* をお送りしていません。ご確認ください。
- 2 『年報』24号への投稿論文を募ります。投稿規程は『年報』の記載通りです。

以 上